

妊娠・育児への影響

監修：日本大学歯学部 准教授 (放射線防護学) 野口 邦和

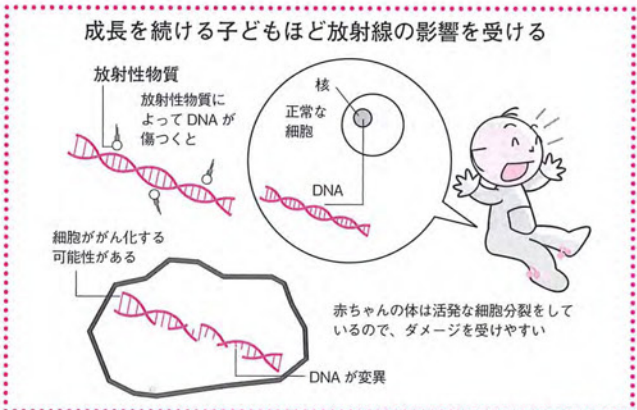
今回のテーマは、
多くのご家庭で心配された、
放射線の「妊娠・育児」への影響です。

赤ちゃん・子どもの健康への放射線の影響は……

今回の原発事故では、妊娠中の人や小さなお子さんのいるご家庭では、とくに大きな心労がかかってしまいました。

大人よりも子どものほうが、放射線の影響を心配しなければならないのは事実です。これは成長期の子どもは細胞分裂が活発であり、細胞分裂の活発な細胞ほど放射線感受性が高いことや、子どもは残りの人生の期間が長いことなどが理由です。実際、チェルノブイリの事故後、放射性ヨウ素の影響による小児甲状腺がんの増加が報告されました。

ただし今回の場合は、幸いにしてそれほどの心配はいらないはずです。主として放出された放射性ヨウ素と放射性セシウムは、それぞれチェルノブイリ事故10分の1と6分の1程度であったと評価されているからです。



また、妊娠中に事故が起こり、生まれてくる赤ちゃんに影響が出てしまうのではないかと心配するお母さんもいましたが、これも安心してよいでしょう。広島・長崎の原爆後の調査で妊娠8～25週の胎児に影響が見られた例も報告されたりしていますが、これは今回とは桁違いに高い放射線に被曝してしまった場合です。低い線量の場合は、生まれてくる赤ちゃんに影響が出ることはありませんでした。今回の事故では、胎児に影響が出るほどの線量を浴びたケースは考えられませんので、ご安心ください。

●母乳に現れた被曝の影響？

事故後、福島県～関東地方の女性を対象に行われた調査で、母乳から放射性物質が検出された例がありました。ニュースで知って、驚かれた方も多いかと思います。ただし検出された放射性物質の量は、食品の暫定規制値(当時)と比べてもはるかに低い値だったこと、またその後の追跡調査で時間とともに検出されなくなっていることなどから、赤ちゃんへの影響は考えられません。暫定規制値は、赤ちゃんなども含めて十分に余裕を持って設定されています。4月からいっそう厳しい新基準値に変わりました。

今、子育てで考えるべきこと

事故から1年以上が経過しました。計画的避難の対象となり、今も不自由な生活を余儀なくされている方は多く、事故が終わったわけではありません。ただし、除染作業が進みつつある状況などを考えると、子育て中のご家庭で注意しなければならないことは、変わってきています。

たとえば事故の直後は、公園の落ち葉やゴミなどから高い線量が計測された例などもあり、公園で子どもを遊ばせるのをためらってしまったり、マスクをつけさせたご家庭もありました。飲料水への懸念から硬水のミネラルウォーターを与え、お子さんのお腹を壊してしまった親御さんや、学校のプールの放射線を気にする声もあつたと聞きます。

現在では、食品に関しては新基準値の範囲内に厳しく管理されていることから、心配はいらないはずです。プールや海水浴に関していえば、大気中の放射性物質は早い段階でほとんど検出されなくなっていたこと、プールの水は水道水を使っていることなどから考えれば、そもそも杞憂だったといえるでしょう。さらに学校の校庭や公園なども土壌の入れ替え・除染が進み、生活上、注意が必要な部分は限りなく減ってきています。

今の心配は、お母さんの側の放射線ストレスです。これはご自身の健康によくないというだけでなく、お子さんの育児によい影響は与えません。

新しい情報や健康のための対策についてアンテナをはることは大切ですが、ご家族や自分の健康を守るためには、情報を受ける側である私たち自身が主体的に考え、判断することが大切です。今回の原発事故と放射線の問題に関しては、そうした面が非常にクローズアップされた問題だったといえるでしょう。

※放射線の健康への影響について解説してきたこのコーナーは、今回で最終回となりました。ご愛読、ありがとうございました。